

ロペ・デ・ベガ，モリスコ追放，オスマン帝国

——「名誉ゆえの不幸」に関する一考察——

三 倉 康 博

(受付 2016年10月24日)

1. はじめに

1492年にイベリア半島最後のイスラーム国家、ナスル朝グラナダ王国の都グラナダが陥落し、数世紀にわたり続いてきたキリスト教徒によるムスリムに対する国土回復運動すなわちレコンキスタが終了したあとも、スペイン国内には多くのムスリムが残留した。彼らは16世紀初頭にキリスト教への改宗と国外退去の二者択一を迫られ、前者を選択した人々はモリスコ (moriscos) と呼ばれるようになったが、内面ではなおイスラーム信仰を保持する人々が多く、またスペインと対峙するオスマン帝国や北アフリカ私掠船団との内通も疑われていた。1568-71年にはグラナダ地方でモリスコたちの大規模な反乱も生じており、彼らをキリスト教スペイン社会に統合することに政府は困難を感じていた。1609年にスペイン国王フェリペ3世 (在位1598-1621) はスペインに居住するほぼすべてのモリスコの追放を命じ、1614年までのあいだに (代表的な研究によれば) 約30万人がスペインを去り、その多くは北アフリカなどイスラーム圏に渡った¹。

このように、16世紀初頭のスペインにおける残留ムスリムの強制的なキリスト教への改宗に端を発するモリスコ問題は、17世紀初頭の追放という悲劇的結末を迎えたのだが、このモリスコ問題を作品で取り上げたスペイン黄金世紀の作家たちは数多い。そのなかで最も研究が進んでいるのは、ミゲル・デ・セルバンテス・サアベドラ (Miguel de Cervantes Saavedra, 1547-1616) に関してであろう²。一方、黄金世紀を代表する作家の一人ロペ・デ・ベガ・カルピオ (Lope de Vega Carpio, 1562-1635) とモリスコ問題とのかかわりは、おそらくロペの

-
- 1 こうしたモリスコ問題に関するすぐれた概説書として、Antonio Domínguez Ortiz & Bernard Vincent, *Historia de los moriscos. Vida y tragedia de una minoría*, Madrid: Revista de Occidente, 1979が挙げられる。追放されたモリスコの数については、約30万人という数字を挙げている (p. 200)。
 - 2 セルバンテスがモリスコやモリスコ追放をどう描いたかについては、多くの研究で論じられ、様々な議論がなされている。セルバンテスがモリスコ追放を支持していたのか批判していたのか、統一的な見解は得られていないが、代表的な研究 (セルバンテスがモリスコ追放への批判を作品に込めていたという解釈である) として、Francisco Márquez Villanueva, *Personajes y temas del Quijote*, Madrid: Taurus, 1975, pp. 229-335; *El problema morisco (desde otras laderas)*, Madrid: Libertarias, 1998, pp. 181-185が挙げられる。

作品数の膨大さも一因で、セルバンテスほどは注目されていない³。

だが、ロベの短編小説「名誉ゆえの不幸」(“La desdicha por la honra”)は、17世紀初頭のモリスコ追放が一人の高貴な血筋を持つモリスコ青年にもたらした悲劇を正面から描いた作品であり、様々な問題性を内包しており、詳細な研究に値する。本稿では、この短編小説でモリスコ追放問題がどのように取り扱われているかを、特に作品後半の舞台となっているオスマン帝国との関連に焦点を当てて、検証したい。

2. 「名誉ゆえの不幸」の梗概、源泉、執筆時期

「名誉ゆえの不幸」は、1624年に、作品集『キルケーおよびその他の韻文と散文』(*La Circe con otras Rimas y Prosas*)のなかの1篇として上梓された。ロベはマルシア・レオナルダという貴婦人⁴に宛てて書いたという設定の短編小説を4篇書いており、「名誉ゆえの不幸」はその1篇である。これら4篇は、彼の没後に、『マルシア・レオナルダ宛小説集』(*Novelas a Marcia Leonarda*)としてまとめられている。

「名誉ゆえの不幸」⁵は、ナスル朝グラナダ王国の名家アベンセラヘ (Abencerraje) 家⁶の末裔であるモリスコ家系のスペイン人イダルゴ⁷で、スペイン領シチリアで副王の寵愛を受け、恋人シルビア (Silvia) と結婚を誓い合うに至っていたフェリサルド (Felisardo) を主人公とする。フェリサルドは両親がモリスコ追放令の対象となったことに精神的衝撃を受

3 ロベの戯曲 (コメディア) におけるモリスコの表象およびモリスコ問題への言及については、Thomas E. Case, *Lope and Islam: Islamic Personages in His Comedias*, Newark, Delaware: Juan de la Cuesta, 1993が論じており、それらの戯曲のなかではモリスコ追放が肯定されている一方で、個々のモリスコは好意的に描かれている場合もあると指摘している (pp.143-174)。また、モリスコの疑いをかけられた貴族を主人公としたロベの戯曲『ヘタフェの村娘』(*La villana de Getafe*)について、Francisco Márquez Villanueva, “Lope, infamado de morisco: *La villana de Getafe*”, in *Lope: Vida y valores*, Río Piedras: Universidad de Puerto Rico, 1988, pp. 147-182が考察しており、ロベが自分にかけてきたモリスコの血を引くという疑惑への回答としてこの戯曲を書いたと論じている。

4 諸研究では、ロベの恋人マルタ・デ・ネバレス・サントヨ (Marta de Nevares Santoyo, 1591-1632) をモデルにしていると考えられている。

5 参照と引用にあたっては、Lope de Vega Carpio, *Novelas a Marcia Leonarda*, ed. Antonio Carreño, Madrid: Cátedra, 2002を用いた。引用箇所を示すさいは *NML* という略称を用い、論文筆者による日本語訳 (貴婦人に宛てて書いたという設定なので、「です・ます」体になっている) の直後に (*NML*, 頁数) という形で該当頁数を示す。[] は論文筆者による補足を示す。

6 アベンセラヘ家はスペイン文学にもしばしば登場する名家で、ヒネス・ベレス・デ・イータ (1544-1619) が1595年に上梓した歴史小説『グラナダ内乱』第1部は、この一族がグラナダ陥落直前にキリスト教に改宗したという伝承を伝えている (Ginés Pérez de Hita, *Guerras civiles de Granada. Primera parte*, ed. Shasta M. Bryant, Newark, Delaware: Juan de la Cuesta, 2^a ed., 2000 (1^a ed., 1982), pp. 207-211)。

7 イダルゴ (hidalgo) は当時のスペインにおける下級貴族で、「郷土」と日本語に訳されることもある。

け，スペイン王への際立った奉仕によって名誉回復をはかるつもりで，シチリアからナポリを経てイスタンブル（テキスト中では，旧称コンスタンティノープルの名で呼ばれている）に渡る。彼は内面のキリスト教信仰を隠して「トルコ人になり」（この言葉は当時，イスラームへの改宗を意味していた），スルタンのアフメト⁸（テキスト中ではアマト（Amath）と表記されている）に仕えオスマン宮廷で栄達しつつも，母国スペインに貢献する英雄的行為を成し遂げてスペインへ帰国する機会をうかがう。最終的に彼は，自分と同じくスペイン出身で，帰国とキリスト教への復帰を願う，スルタンの寵妃マリア（María）を連れてイスタンブルからの脱出を図るが，嵐によって果たせず，スルタンの近衛兵であるイエニチェリたちに殺害される。筋立てのうえではペシミスティックな小説である。

この短編小説に関しては，シチリア人聖職者で，自由を奪われたキリスト教徒虜囚として，また解放後はイスタンブル駐在フランス大使付司祭として，17世紀はじめにイスタンブルに長期滞在し，オスマン帝国をじかに目撃したオタビオ・サピエンシア（Otavio Sapiencia，生没年不詳）が1622年に出版した『トルコに関する新論述』（*Nuevo tratado de Turquia*）⁹を情報源として利用していることが，フランスの碩学マルセル・バタイヨンにより指摘されている¹⁰。特にフェリサルドのエピソードの創造にあたっては，サピエンシアが伝える，謎の用件でイスタンブルに来たあとイスラームへの改宗を強要されてスルタンに仕えるようになったスペイン人改宗者ヘロニモ・デ・ウレア（Jerónimo de Urrea）が脱走に失

8 後述のオタビオ・サピエンシアがイスタンブルに滞在していた時期のスルタンで彼の著作に登場する，アフメト1世（在位1603-1617）をモデルにしていると思われる。

9 Otavio Sapiencia, *Nuevo tratado de Turquia, con una descripcion del sitio, y ciudad de Constantinopla, costumbres del gran Turco, de su modo de gouierno, de su Palacio, Consejo, martyrios de algunos Martyres, y de otras cosas notables. Compuesto por D. Otavio Sapiencia Clerigo presbytero natural de la ciudad de Catania en el Reyno de Sicilia, que estuuo cautiuo en Turquia cinco años, y siete con libertad. Dedicado a la Magestad del Rey Catolico don Felipe III. nuestro Señor*, Madrid: Viuda de Alonso Martín, 1622（スペイン国立図書館 R-7760）。“notables”までのタイトル主要部分を全訳すると、『トルコに関する新論述，およびコンスタンティノープルの立地と町，大トルコ〔スルタン〕の習慣とその統治方法，その宮殿と御前会議，何人かの殉教者たちの殉教，そしてその他の際立った事柄の記述』となる。

オタビオ・サピエンシアの生涯については，その著作『トルコに関する新論述』が唯一の手がかりである。シチリア島カタニア出身の聖職者であったサピエンシアは，1604年，ナポリからパレルモに向かう航海の途中に，北アフリカの私掠船に襲われて虜囚となり，ガレー船漕手として地中海各地を転々とする生活を約5年間過ごした（うち最初の2年ほどは北アフリカが，あとの3年ほどはイスタンブルが，属する船の母港だったようである）。彼はイスタンブルで身請けにより自由を回復したあと，すぐには帰国せず，イスタンブル駐在フランス大使付司祭という自由な身分で，オスマン帝国の都にさらに7年間住み続けた。オスマン帝国を去ってからの彼の人生ははっきりしないが，『トルコに関する新論述』がマドリードで出版された1622年の前後には，スペインに滞在していたものと考えられる。

10 Marcel Bataillon, “La desdicha por la honra: génesis y sentido de una novela de Lope”, in *Varia lección de clásicos españoles*, Madrid: Gredos, 1964, pp. 373-418.

敗し、内心に保持してきたキリスト教信仰を告白して殉教したというエピソード¹¹——バタイヨンによればそれはさらにまた、当時のシチリア副王の庶子で、アルジェの私掠船に捕えられてイスタンブルに連れてこられたあと自発的にイスラームに改宗し、ヘロニモ・デ・ウレアと同様の経緯を経て最後はキリスト教徒として死んだディエゴ・アントニオ・パチェーコ (Diego Antonio Pacheco, 1594–1616) の実話に基づいていると想定される——を下敷きに行っていると考えられる¹²。しかし、主人公をモリスコという設定にして、記憶の新しいモリスコ追放という歴史的事件とこの物語を結びつけたのは、ロペの独創である。

またロペは、文学創作上のライバルとしてセルバンテスを意識していたので、バタイヨンによれば、「名誉ゆえの不幸」の執筆にさいしても——とりわけスルタンの寵妃マリアの造形にあたって——、セルバンテスの戯曲『偉大なるスルタン妃』 (*La gran sultana*)¹³や、イスラーム世界を描いた彼のその他の作品から、多かれ少なかれ刺激を受けたことが考えられる¹⁴。

「名誉ゆえの不幸」の執筆時期は、サピエンシアの著作が出版された1622年から、ロペの『キルケーおよびその他の韻文と散文』が上梓された1624年までの期間だと考えられる。

3. 「名誉ゆえの不幸」とモリスコ問題：先行研究

「名誉ゆえの不幸」や『マルシア・レオナルダ宛小説集』全体に関する先行研究は少なくはないが、それらの研究はロペの文学観や小説技法に焦点を当てていることが多い¹⁵。モリ

11 Sapiencia, *op.cit.*, fols. 65v–68r.

12 Bataillon, *op.cit.*, pp. 381–389.

13 1615年に出版された戯曲集『いまだかつて上演されたことのない新作コメディア 8 篇と新作幕間劇 8 篇』 (*Ocho comedias y ocho entremeses nuevos, nunca representados*) に収録されている。

14 Bataillon, *op.cit.*, pp. 378, 380.

15 ロペの『マルシア・レオナルダ宛小説集』の技法的側面や作中で提示される文学観に関し総合的な分析をした研究を紹介すると、先駆的なものとしては、Francisco Ynduráin, *Lope de Vega como novelador*, Santander: Universidad Internacional Menéndez Pelayo, 1962があり、『マルシア・レオナルダ宛小説集』を含めたロペの小説作品全体を論じているが、ロペの小説は欠点が多く文学的価値において戯曲に劣るという主張に終始している。「名誉ゆえの不幸」についても、凡作という評価である (pp. 57–59)。近年の充実した研究としては、以下の三つが挙げられる。Marina Scordilis Brownlee, *The Poetics of Literary Theory: Lope de Vega's Novelas a Marcia Leonarda and Their Cervantine Context*, Madrid: José Porrúa Turanzas, 1981は、『マルシア・レオナルダ宛小説集』とセルバンテスの諸作品のあいだにみられる間テクスト性に注目し、ロペが『マルシア・レオナルダ宛小説集』においてセルバンテスをパロディ的に超克することを目指したとする。Carmen R. Rabell, *Lope de Vega. El arte nuevo de hacer 'novellas'*, London: Tamesis, 1992は、ルネサンス期に再発見されたアリストテレスの文学理論や中世に流布していたホラティウス等の文学理論を自分流に解釈したロペがどのような小説観に基づき『マルシア・レオナルダ宛小説集』を執筆したかを論じている。María Ángeles Fernández-Cifuentes, *Tradición e innovación en las Novelas a Marcia Leonarda de Lope de Vega*, New York: Peter Lang, 2013は、『マルシア・レオナルダ宛小説集』の 4 ↗

スコ問題という視点から詳細な作品解釈をおこなっているのは、管見の及ぶかぎり、ホルヘ・チェカの研究が唯一である¹⁶。

ホルヘ・チェカの研究は、モリスコの血を引くスペイン貴族という、モリスコのなかでも例外的な立ち位置にいたフェリサルドがモリスコ追放令によってこうむった深刻なアイデンティティの危機を精緻に分析している点で、すぐれた研究である。

しかしチェカの研究の問題点は、作品におけるオスマン帝国の位置づけを重視せず、その否定的描写を強調している点である¹⁷。確かに、「名誉ゆえの不幸」のなかで、スルタンの重臣同士の宮廷闘争で敗北した大宰相が処刑されるエピソード（*NML*, pp. 222-225）は血な

篇において、語り手とマルシア・レオナルダの対話という枠組みと、それぞれのストーリーを、ロベが有機的に結びつけ、メタフィクションを基調とする文学空間を創造したと論じている。三つの研究のいずれも「名誉ゆえの不幸」に1章をあてているが、モリスコ問題への関心は薄い。

「名誉ゆえの不幸」に限定してロベの文学観や小説技法に焦点を当てた研究を紹介すると、Agustín Redondo, “*La desdicha por la honra: de la concepción lúdica de la novela a la transgresión ideológica*”, in Maria Grazia Profeti (ed.), “*Otro Lope no ha de haber*”. *Atti del Congresso Internazionale su Lope de Vega, 10-13 febbraio 1999*, 3 vols, Firenze: Alianea, 2000, I, pp. 159-173が、この小説を、ロベの時代に人気を博したトルコ・テーマをパロディにした遊戯的な作品と位置付けている。「血の純潔」観念（ユダヤ教徒やムスリムの祖先を持たないことを名誉とみなす観念）をもロベがパロディの対象にしている可能性を指摘しているものの、オスマン帝国やモリスコ問題に大きな意味を見出してはいない。また Fernando Rodríguez Mansilla, “*La desdicha por la honra y la batalla en torno a Góngora*”, *Anuario Lope de Vega*, 16 (2010), pp. 107-124は、ゴンゴラに代表される衛術主義（*culteranismo*）への批判を巧妙に織り込んでロベがこの小説を執筆したと論じている。

ロベの小説技法とは別の観点から「名誉ゆえの不幸」を分析した研究としては、前述の Bataillon, *op.cit.* および Albert Mas, *Les turcs dans la littérature espagnole du Siècle d'Or (Recherches sur l'évolution d'un thème littéraire)*, 2 vols., Paris: Centre de Recherches Hispaniques, 1967, I, pp. 483-496が、ロベがオスマン帝国に関する情報をどのように利用したかに焦点を当てているが、モリスコ問題への言及はほとんどない。Benedetta Belloni, “De príncipes, mecenas y moriscos en la novela *La desdicha por la honra* de Lope de Vega”, in Carlos Mata Induráin, Adrián J. Sáez y Ana Zúñiga Lacruz (eds.), “*Festina lente*”. *Actas del II Congreso Internacional Jóvenes Investigadores Siglo de Oro (JISO 2012)*, Pamplona: Universidad de Navarra / Publicaciones Digitales Griso, 2013, pp. 35-45は、作品に登場するシチリア副王のモデルや、作中で言及される、サアド朝モロッコの亡命王族でキリスト教に改宗したドン・フェリペ・デ・アフリカ（don Felipe de África）とロベの交友について論じている。Benedetta Belloni, “El viaje al exilio de un morisco de ficción: memoria literaria del desarraigo hispano-musulmán en la novela *La desdicha por la honra* de Lope de Vega”, in Sònia Boadas, Félix Ernesto Chávez & Daniel García Vicens (eds.), *La tinta en la clespidra. Fuentes, historia y tradición en la literatura hispánica*, Barcelona: PPU, 2012, pp. 117-126は、モリスコ追放という歴史背景と「名誉ゆえの不幸」の関連、特にイスタンブルやアナトリアへのモリスコの移住という歴史的事実がこの作品に反映されていることを論じているが、文学作品としての解釈には踏み込んでいない。また、Ana L. Baquero Escudero, “Variaciones literarias sobre la expulsión de los moriscos: Cervantes y Lope de Vega”, *Murgetana*, 131 (2014), pp. 11-23は、セルバンテスの諸作品におけるモリスコ問題の描写とロベの「名誉ゆえの不幸」におけるそれを比較しているが、論述の中心はセルバンテス作品が占めており、「名誉ゆえの不幸」に関しては、モリスコ問題は冒険物語の道具立てにすぎず、歴史的現実は重要性を与えられていないと論じている。

16 Jorge Checa, “Lope de Vega ante la cuestión morisca: ideología y juego literario en *La desdicha por la honra*”, *Anuario Lope de Vega*, 7 (2001), pp. 7-24.

17 *Ibid.*, pp. 16-17.

まぐさく描かれており、トルコ人の「残酷さ」、「暴力性」というステレオタイプの見方（後述）を強化している。

だがそれは、この作品におけるオスマン帝国の表象の一面にすぎない。「名誉ゆえの不幸」におけるオスマン帝国は、スペインとの対比を示唆しつつ多面的に描かれており、それがさらに、モリスコ問題に独自の光を投げかけている。次節以降でその点を論証したい。

4. 「名誉ゆえの不幸」とオスマン帝国

4.1. 二つの帝国と、軍事的色彩の欠如

16世紀のスペインでは、オスマン帝国は、キリスト教世界の盟主と位置付けられたスペインと地中海の覇権を争う宿敵とみなされていた。当時のスペイン作家たちは、神聖ローマ帝国皇帝カール5世（在位1519-56、スペイン国王カルロス1世としては在位1516-56）、スペイン国王フェリペ2世（在位1556-98）がオスマン帝国を滅ぼすためのヨーロッパの十字軍を主導することを期待した¹⁸。そのような文脈のなかで作家たちは、オスマン帝国の強大な軍事力を強調するとともに、トルコ人の「暴力性」や「残酷性」を喧伝した¹⁹。

だが、1581年の両帝国の休戦で、スペインとオスマン帝国の直接の軍事衝突は終わりを告げる。その後スペインの脅威となったのは、オスマン帝国中央に名目上は服属しつつも自立の度合いを強める、アルジェをはじめとする北アフリカ諸都市の私掠船団であり、スルタンの指揮するイエニチェリ部隊や、イスタンブルのオスマン艦隊がスペインの直接の脅威であると感じられることはなくなった²⁰。

スペイン国内のモリスコ問題も、オスマン帝国と無縁ではなかった。モリスコは16世紀からオスマン帝国や北アフリカ諸都市との内通を疑われ、「第五列」の嫌疑をかけられてきた。西土休戦以降、モリスコの協力を得たオスマン軍が大挙してスペインに来寇するというのは非現実的になったが、この「内通」言説は根強く続き、17世紀初頭のモリスコ追放という極端な政策の主導者たちが、自分たちの論拠の一つにもしている²¹。

18 Mas, *op.cit.*, II, pp. 153-157, 207-216および Miguel Ángel de Bunes Ibarra, *La imagen de los musulmanes y del Norte de África en la España de los siglos XVI y XVII. Los caracteres de una hostilidad*, Madrid: CSIC, 1989, pp. 303-304. また、この点に関しては、三倉康博「二大帝国の対立から融和へ——セルバンテスの『偉大なるスルタン妃』に関する一考察——」『広島修大論集』、第53巻第2号、2013年、19-23頁のなかでも論じている。

19 Mas, *op.cit.*, II, pp. 177-188, 301-311; Bunes Ibarra, *op.cit.*, pp. 69-91.

20 この休戦交渉およびその影響については、Fernand Braudel, *La Méditerranée et le monde méditerranéen à l'époque de Philippe II*, 2 vols., Paris: Armand Colin, 9^e éd., 1990 (1^e éd., 1949), II, pp. 431-468および María José Rodríguez Salgado, *Felipe II, el «Paladín de la cristiandad» y la paz con el Turco*, Valladolid: Universidad de Valladolid, 2004を参照。

21 Márquez Villanueva, *El problema morisco*, pp. 141-166.

さて，このような文脈のなかにロベ・デ・ベガの「名誉ゆえの不幸」を位置づけると，どのような意味がみえてくるだろうか。

「名誉ゆえの不幸」は，スペイン王とオスマン帝国のスルタンという二人の君主に対する忠誠のあいだで揺れ動くモリスコ貴族を主人公とする小説であり，その基本的な筋立て自体に，二つの大帝国の比較対照という意識がみられる。しかもそれだけではなく，この作品には，イタリアを挟んで対峙する二つの大帝国という構図がみられる。イスタンブルへ出奔する前のフェリサルドは，スペイン貴族として，スペイン支配下のイタリアに渡り，スペイン支配を嫌悪するイタリア人と衝突し，シチリア副王に仕えて支配階層の一員として過ごす。イスタンブルに渡ったあとは，今度はオスマン帝国艦隊を率いて南イタリア沿岸を遊弋する。中部地中海の覇権を巡って衝突した，1581年の休戦までの両帝国の敵対関係——南イタリアはその最前線の一つであった——が，構図のうえではここに再現されている。

しかしながら，西土休戦から40年以上が経過してから上梓されたこの小説においては，二大帝国の関係には，もはや強い軍事的色彩はみられない。フェリサルドの率いるオスマン艦隊はガレー船数隻の小艦隊に過ぎず，地中海でキリスト教徒を攻撃するさいも彼はスペイン王の臣下は保護し，シチリア島に來寇したさいは，別れた恋人シルビアとの再会を果たしている。そこにあるのは，両帝国の大艦隊が対峙した時代の，わずかな，牧歌的な残滓にすぎない。

軍事的対立から遠ざかった二大帝国の関係は，ロベ・デ・ベガの描くスルタンの言動からも，象徴的な形で浮き彫りになる。「名誉ゆえの不幸」のスルタンは，ヨーロッパの大使や商人たちが持ってくるキリスト教徒の肖像画を見るのが好きで，あるときフェリサルドに，届いたばかりのいくつかの絵の解説をさせるが，それらはスペインの王と貴族たちのものであった。

フェリサルドが参上すると，それらの肖像画を知っているかとアフメトは彼に尋ねました。彼は知っておりますと答え，それぞれの名を挙げて説明していきました。自分が熟知しているそれぞれの人物の偉大さ，姓と家系を解説しながら。皇帝カール5世，[フェリペ] 2世王と3世王，名高いアルバ公，フエンテス伯，その他の貴族たちを知りアフメトは大いに喜びました。(NML, p. 211)

歴代のスペイン王たちの肖像画を見て喜ぶオスマン帝国のスルタン。その造形に，スペインとオスマン帝国を並び立つ二大帝国とみなす意識を読み取ることができるが，そこに軍事

的色彩は皆無である²²。前述のように、16世紀のスペイン作家たちは、ハブスブルク朝スペインの君主たちがオスマン帝国を滅ぼすためのヨーロッパの十字軍を率いることを期待したが、その君主たちの肖像画をスルタンが眺めて楽しむ「名誉ゆえの不幸」では、それは遠い過去の逸話となっているのである。

「名誉ゆえの不幸」は、先述のように、スルタンの重臣同士の血なまぐさい宮廷闘争も描いており、これはトルコ人の「暴力性」「残酷さ」というステレオタイプにつながるのだが、しかしこの作品においては、「トルコ人の暴力」がキリスト教世界を主な標的としていない点に注意すべきである。この作品には、オスマン帝国がキリスト教世界に及ぼす軍事的脅威は、ほとんど感じられない。戦争の影は、むしろオスマン帝国と東方のサファヴィー朝ペルシアのあいだに存在する（小説中に、ペルシアとの戦役に関する記述がある（*NML*, pp. 222-223））。

このようにスペインとオスマン帝国の関係から軍事的脅威の側面を排した点は、少し前（1615年）にイスタンブルを舞台にした戯曲『偉大なるスルタン妃』を上梓したセルバンテスにもみられることであり、そこには、西土休戦以降に両帝国のあいだにおとずれた和平が反映されていると考えられる²³。前述のようにモリスコが伝統的にオスマン帝国との内通を疑われてきた——西土休戦後の17世紀には、オスマン帝国中枢部とモリスコの連携はもはや現実性のない噂にすぎなかったが——ことを考えれば、このようにオスマン帝国とスペインの関係から軍事的緊張感を排したことは、モリスコの主人公がオスマン帝国の首府に移住するという作品の展開に重要な意味を与えている。つまり、そのように軍事的色彩を薄めてオスマン帝国を描写した結果として、フェリサルドのイスタンブル移住——それは一見すれば、モリスコがオスマン帝国の「第五列」であるという言説に沿っているかのようにみえる——からは、スペインへの裏切りという色彩が消えて、「スペイン王への奉仕」のチャンスをうかがうフェリサルドの意図が説得力を持ち、またモリスコに対するスペインとオスマン帝国それぞれの対応の比較を、同時代の読者はより受け入れやすくなっているのである。

4.2. 二つの社会の、モリスコに対する異なる対応

では、「名誉ゆえの不幸」において、スペインとオスマン帝国のあいだにどのような対比がみられるだろうか。

重要なのは、スペインからイタリアを経てオスマン帝国へ渡るフェリサルドの生の軌跡を

22 Mas, *op.cit.*, II, p. 228はこの場面に、スペイン人としての自尊心の間接的な発露を見出している。そのような面は確かにあるが、より重要なのは、軍事的色彩が欠落していることであると思われる。

23 三倉, 前掲論文, 23-28頁。

通して、モリスコに対する二つの社会の異なる姿勢が対比されている点である。すなわち、ロベのこの小説においては、モリスコにキリスト教信仰を強制しながら最後には追放してしまつたスペイン、その閉鎖性によりフェリサルドを亡命へ駆り立てるスペインと、イスラームに（表面的に）改宗したフェリサルドをすぐにパシャに取り立て、彼を功績だけによって評価するオスマン帝国の対比を読み取ることができるのである。

イスラーム・スペイン最後の王朝であるナスル朝グラナダの名門貴族アベンセラヘ家の血筋を引く自分の貴族性を、フェリサルドはかつて疑つたことがなかったが、自分の両親がモリスコ追放令の対象となりイスタンブルに渡つたことに衝撃を受ける。血統に基づく貴族性と名誉を喪失したと考える彼は、何らかの功績によってそれを回復しようとする。その目的地として彼が選んだのは、オスマン帝国の首府イスタンブルであつた。

語り手はオスマン帝国への渡航を決断したフェリサルドを批判するが——「こうして向こう見ずで思慮を欠いた若者フェリサルドは船出しました。彼の行動を私は賞賛できません」（*NML*, p. 204）「つまりフェリサルドはトルコ人になったのです。私には容認できません」（*NML*, p. 210）——、フェリサルドがイスタンブルに到着して以降のストーリー展開から明らかになるのは、スペインとは異なる開放的な性質を持った社会の姿である。

フェリサルドは、自分がオスマン帝国の首府に渡る真の目的は、「神、国王、わが祖国に大きな奉仕をなすこと」（*NML*, p. 204）であるとシチリア副王に説明し、スルタンの寵妃マリアには「スペイン王への奉仕として何か際立つたことをするつもりで」（*NML*, p. 213）自分はイスタンブルに来たのであり、「自分の志は高く、何か大きな功績によって評価され守られてでなければ、スペインに帰るつもりはない」（*NML*, p. 213）のだと強調する。

だが皮肉なことに、フェリサルドはイスラーム信仰とスルタンへの臣従を装つてその艦隊を地中海で指揮する——前述のように、スペイン王の臣下には危害を加えないという条件を自分に課してのことだが——うちにオスマン帝国に対して多くの奉仕をなし、その実力と功績のみによって高い評価を受け、短期間でオスマン宮廷のなかで栄達する。

シチリアを出奔したフェリサルドを諫めようと手紙を送つたシチリア副王は、庇護を申し出るとともに、「そなたを隊長にし、私の手で結婚させてやろう」（*NML*, p. 203）と約束している。だが、このシチリア副王の言葉は、実はオスマン帝国のスルタンがすべて実現しようとしている（ただし、スルタンの姉妹あるいは娘のファティマ（Fátima）²⁴との結婚は、スルタンが意欲を示したものの、寵妃マリアの妨害により実現しないが）のである²⁵。

スルタンの寵妃であるスペイン人女性を連れて脱走・帰国するというのが、フェリサルド

24 この女性がスルタンの姉妹なのか娘なのか、作品中では曖昧である。

25 副王とスルタンがフェリサルドに対し類似した役割を果たすことは、ホルヘ・チェカにより指摘されている（Checa, *op.cit.*, p.15）。

が最終的に選択した「スペイン王への奉仕」であったのだが、たとえそれが成功したとしても、彼が望むようにスペインにおける貴族性と名誉の回復につながったかどうかは謎にされたまま、計画の失敗とフェリサルドの死という形でこの作品は終わる。読者に残されるのは、血統原理に基づくスペイン社会と、血統を重視せず能力によって人物を評価するオスマン社会の対比であり、そのどちらにも安住の地を見出せなかった一人のモリスコ青年の悲劇である。

しかも、ロペのテキストのなかでは、最終的にフェリサルドがオスマン帝国での生活に魅力を感じるようになり、また流れ者である自分を重用したスルタンにも恩義を感じていたことが示唆されている。

たとえば、オスマン艦隊を率いてシチリア近海に立ち寄ったときの彼の様子を描いた箇所をみると——「フェリサルドは絹で編まれたなかに金糸を織り込んだトルコ風の敷物のうえにもたれかかっており、真珠色をした二つのペルシア風紋織りクッションに腕を置いておりました」(NML, p. 218)。

また、脱走に失敗しイエニチェリに討たれて死ぬ間際、フェリサルドは自分のキリスト教信仰を明言する。彼は最後には「殉教者」として死ぬ。しかしその一方で彼は、スルタンへの弁明を付け加えることを忘れない。「トルコ人たちよ、私がキリスト教徒として死ぬことの、そしてドニャ・マリアを、キリスト教徒でいられる場所に連れて行くこと以外には、陛下には害をなしていないことの、証人となってほしい」(NML, p. 229)。

スペインとオスマン帝国のあいだで揺れ動くフェリサルドの悲劇が、当時のモリスコが置かれていた文化的アイデンティティの危機を象徴的に描いているということは、先に挙げたホルヘ・チェカの研究が指摘している²⁶。本稿で明らかにしたのは、フェリサルドが板挟みになる二つの社会、つまりスペインとオスマン帝国それぞれの、モリスコに対する姿勢を対比する構図を「名誉ゆえの不幸」のなかに読み取ることができ、トルコ人に対するステレオタイプの描写はあっても、少なくともモリスコへの姿勢に関しては、二つの社会のあいだに優劣がつけられてはいないということである。フェリサルドの悲劇的な最期は、二つの社会が最終的には相容れないことを示唆してはいるものの、二つの社会の対比についての最終的な結論を出すのは、読者に委ねられている。

5. む す び

「名誉ゆえの不幸」は、フェリサルドという一人のモリスコ人物を通して、開放的なオス

26 *Ibid.*, p. 17.

マン帝国と閉鎖的なスペインという二つの社会それぞれがモリスコに対して示した姿勢を、対照的に浮かび上がらせている。オスマン帝国の開放的性格という特質は、16世紀いらいヨーロッパそしてスペインの作家たちに注目されてきたが²⁷、17世紀初頭のスペインに生じたモリスコ追放という事件は、ロペ・デ・ベガがこの特質に改めて光を当てる契機となったと言えよう。「名誉ゆえの不幸」では、モリスコ追放に巻き込まれ動揺し、希望に満ちたそれまでの生活を捨て、表面上イスラームに改宗して「トルコ人になる」ものの、最後まで自己のアイデンティティを再確立できないフェリサルドの悲劇が描かれるが、そこに通底するのは、オスマン帝国の開放的性格を描くことで閉鎖的なキリスト教社会スペインを相対化するという視点である。その視点は、フェリサルドの殉教で具体化するキリスト教的模範性の称揚——当時のスペインのいかなる作家も、この命題から逃れることはできなかった——と微妙な均衡を保っている。

参 考 文 献

- Baquero Escudero, Ana L., “Variaciones literarias sobre la expulsión de los moriscos: Cervantes y Lope de Vega”, *Murgetana*, 131(2014), pp. 11–23.
- Bataillon, Marcel, “*La desdicha por la honra*: génesis y sentido de una novela de Lope”, in *Varia lección de clásicos españoles*, Madrid: Gredos, 1964, pp. 373–418.
- Belloni, Benedetta, “El viaje al exilio de un morisco de ficción: memoria literaria del desarraigo hispano-musulmán en la novela *La desdicha por la honra* de Lope de Vega”, in Sònia Boadas, Félix Ernesto Chávez & Daniel García Vicens (eds.), *La tinta en la clespidra. Fuentes, historia y tradición en la literatura hispánica*, Barcelona: PPU, 2012, pp. 117–126.
- , “De príncipes, mecenas y moriscos en la novela *La desdicha por la honra* de Lope de Vega”, in Carlos Mata Induráin, Adrián J. Sáez y Ana Zúñiga Lacruz (eds.), “*Festina lente*”. *Actas del II Congreso Internacional Jóvenes Investigadores Siglo de Oro (JISO 2012)*, Pamplona: Universidad de Navarra / Publicaciones Digitales Griso, 2013, pp. 35–45.
- Braudel, Fernand, *La Méditerranée et le monde méditerranéen à l'époque de Philippe II*, Paris: Armand Colin, 1949. 4^e éd., revue et corrigée, 2 vols., 1979. 9^e éd., 2 vols., 1990.
- Bunes Ibarra, Miguel Ángel de, *La imagen de los musulmanes y del Norte de África en la España de los siglos XVI y XVII. Los caracteres de una hostilidad*, Madrid: CSIC, 1989.
- Case, Thomas E., *Lope and Islam: Islamic Personages in His Comedias*, Newark, Delaware: Juan de la Cuesta, 1993.
- Checa, Jorge, “Lope de Vega ante la cuestión morisca: ideología y juego literario en *La desdicha por la honra*”, *Anuario Lope de Vega*, 7 (2001), pp. 7–24.
- Çırakman, Asli, *From the “Terror of the World” to the “Sick Man of Europe”. European Images of Ottoman Empire and Society from the Sixteenth Century to the Nineteenth*, New York: Peter Lang, 2002.
- Domínguez Ortiz, Antonio & Bernard Vincent, *Historia de los moriscos. Vida y tragedia de una minoría*, Madrid: Revista de Occidente, 1979.
- Fernández-Cifuentes, María Angeles, *Tradición e innovación en las Novelas a Marcia Leonarda de Lope de Vega*,
-
- 27 Mas, *op.cit.*, I, pp. 151–152; II, p. 338; Bunes Ibarra, *op.cit.*, pp. 192–193; Asli Çırakman, *From the “Terror of the World” to the “Sick Man of Europe”. European Images of Ottoman Empire and Society from the Sixteenth Century to the Nineteenth*, New York: Peter Lang, 2002, pp. 53–61.

- New York: Peter Lang, 2013.
- Márquez Villanueva, Francisco, *Personajes y temas del Quijote*, Madrid: Taurus, 1975.
- , “Lope, infamado de morisco: *La villana de Getafe*”, in *Lope: Vida y valores*, Río Piedras: Universidad de Puerto Rico, 1988, pp. 147–182.
- , *El problema morisco (desde otras laderas)*, Madrid: Libertarias, 1998.
- Mas, Albert, *Les turcs dans la littérature espagnole du Siècle d’Or (Recherches sur l’évolution d’un thème littéraire)*, 2 vols., Paris: Centre de Recherches Hispaniques, 1967.
- Pérez de Hita, Ginés, *Guerras civiles de Granada. Primera parte*, ed. Shasta M. Bryant, Newark, Delaware: Juan de la Cuesta, 1982. 2^a ed., 2000.
- Rabell, Carmen R., *Lope de Vega. El arte nuevo de hacer “novellas”*, London: Támesis, 1992.
- Redondo, Agustín, “*La desdicha por la honra*: de la concepción lúdica de la novela a la transgresión ideológica”, in María Grazia Profeti (ed.), “*Otro Lope no ha de haber*”. *Acti del Congreso Internazionale su Lope de Vega, 10–13 febbraio 1999*, 3vols, Firenze: Aliaena, 2000, I, pp. 159–173.
- Rodríguez Mansilla, Fernando, “*La desdicha por la honra* y la batalla en torno a Góngora”, *Anuario Lope de Vega*, 16 (2010), pp. 107–124.
- Rodríguez Salgado, María José, *Felipe II, el «Paladín de la cristiandad» y la paz con el Turco*, Valladolid: Universidad de Valladolid, 2004.
- Sapiencia, Otavio, *Nuevo tratado de Turquia, con una descripción del sitio, y ciudad de Constantinopla, costumbres del gran Turco, de su modo de gobierno, de su Palacio, Consejo, martyrios de algunos Martyres, y de otras cosas notables. Compuesto por D. Otavio Sapiencia Clerigo presbytero natural de la ciudad de Catania en el Reyno de Sicilia, que estuuo cautiuo en Turquia cinco años, y siete con libertad. Dedicado a la Magestad del Rey Catolico don Felipe III. nuestro Señor*, Madrid: Viuda de Alonso Martín, 1622 (スペイン国立図書館 R-7760).
- Scordilis Brownlee, Marina, *The Poetics of Literary Theory: Lope de Vega’s Novelas a Marcia Leonarda and Their Cervantine Context*, Madrid: José Porrúa Turanzas, 1981.
- Vega Carpio, Lope de, *Novelas a Marcia Leonarda*, ed. Antonio Carreño, Madrid: Cátedra, 2002.
- Ynduráin, Francisco, *Lope de Vega como novelador*, Santander: Universidad Internacional Menéndez Pelayo, 1962.
- 三倉康博「二大帝国の対立から融和へ——セルバンテスの『偉大なるスルタン妃』に関する一考察——」『広島修大論集』, 第53巻第2号, 2013年, 17–30頁。

Summary

Lope de Vega, the Expulsion of the Moriscos, and the Ottoman Empire: A Study of “La desdicha por la honra”

Yasuhiro Mikura

This study analyzes within historical context how Lope de Vega Carpio (1562–1635) related the issue of the Moriscos’ expulsion from Spain (carried out during 1609–1614) to the image of the Ottoman Empire depicted in his novella, “La desdicha por la honra” [“Calamity for Honor’s Sake”] (1624). This is one of the four novellas that today constitute what are known as *Novelas a Marcia Leonarda* [*Novellas for Marcia Leonarda*].

In this novella, Felisardo, the protagonist and a Morisco noble, shocked by the decree of the expulsion, migrates to Istanbul. Serving the Ottoman sultan, who treats him very well, he seeks a chance for offering a special service to the Spanish monarch and thus recovering his lost honor. In this respect, we should note that, while in the 16th century, Spanish writers described the Ottoman Empire as Spain’s mortal enemy to destroy, in “La desdicha por la honra”, written about 40 years after the Hispano–Ottoman armistice of 1581, there is no military rivalry between the two Empires. This change in image of the Ottoman Empire seems to have enabled the readers of the day to accept Felisardo’s decision and to compare, through his fate, Spain’s cruel expulsion of the Moriscos (a result of the religious and racial exclusiveness of Spanish society) and the Ottoman Empire’s warm acceptance of them—an acceptance that reflected the meritocracy and openness of the Ottoman society.

